

WINDY

2018.3
vol.18



2/11 開催「働く女性の交流会」の様子



瀬戸市では、二月を男女共同参画推進月間とし、セミナーや川柳コンクールの表彰式、啓発パネルの展示など、様々な取組を行いました。

二月十七日に開催した「ライフ・ワーク・バランスセミナー 夢につながるバランス」の中で、講師の原田隆史は「プラス思考」「プラスの習慣形成」が仕事のパフォーマンスを高め、生活と仕事の調和（ライフ・ワーク・バランス）につながっていく、とおっしゃっていました。「心のコップを上向き」にして、常にプラス思考を心がけ、ライフ・ワーク・バランスを目指したいですね。

【内容】

- ・ 高校生インターンによる活躍する女性へのインタビュー
- ・ 瀬戸市男女共同参画社会推進川柳コンクール 入賞作品の紹介

高校生インターンが、チャレンジする女性にインタビュー！

二〇一七年夏、瀬戸市役所へインターンシップに来た聖霊高等学校二年生の大野さくらさんと松永紗季さんが、シェンダーや自分らしく生きることについて知るために、瀬戸市で活躍する女性にインタビューをしました。

Interview 01

通訳・多文化ソーシャルワーカー

神田 すみれ さん

大事なのは、自らが望み、選択して決めているかどうか。



マルチキャリアなワークスタイル

外国人向けのハローワークでの通訳・外国人雇用管理アドバイザー、高校の海外交流アドバイザー、保健所の外国人向け母親教室での通訳、大学の非常勤講師、外国人向け法律相談通訳、海外からの視察団等のアテンド通訳などを行っています。

その他にボランティアで外国人の相談対応をしています。

今の道に進んだきっかけ

十五歳のときにアメリカへ渡り、現地の高校、大学を卒業し、台湾へ渡った後、二十六歳で帰国しました。貿易会社や英会話スクールでの勤務を経て、行政の関係団体の仕事を通じて外国人の対応をする中で、地域の外国人の困りごとを知りました。その後、大学院で移民のことなどを学びながら地域に暮らす外国人のために働きたいと考えるようになりました。

海外と日本のちがい

アメリカや台湾では性別による明確な差別をあまり経験しませんが、日本で働き始めた頃は、女性である私が年上の男性に意見を言うことは非常識だと注意を受けたり、お茶出しやお酒を注いだりするのが女性の役割であったり、性別による役割分担意識の強さを感じました。当初はとまどいましたが、その場や相手の文化背景等に応じて、今では私自身が自らお酒を注いだり、料理を取り分けたりする役割を引き受けることもあります。相手のことを考えた時、自分がそうしたいと思うからする行為です。大事なのは、そのような行為が、社会から押し付けられていないかどうか、自分で決めてやっているかどうかだと思います。

生活と仕事の両立、子どもとジェンダー

私の仕事が不規則なので、夫も積極的に育児の役割を担っています。

ある日子供が、保育園のお迎えについて、私に「何でうちだけパパが迎えに来るの?」とたずねました。小さな子供にも知らないうちにジェンダーバイアスが植え付けられていくことを感じました。偏った価値観を持つことで、子どもが将来困ったり苦しめられたりすることがないように、大人が意識をして子どもに接することが大切だと感じます。

今後の目標

社会の穴に落ちてしまった外国人が、サポートをすることでその穴から出て、再び日常生活を取り戻すことができるときには大きなやりがいを感じます。一方で、困り事を抱える人が減ることはなく、無力に感じる自分があります。社会の穴に落ちてしまう人を生み出しているものは何なのか。仕組み作りに関わることで構造に変化をもたらすことができなにか、と考えています。

進路に悩んでいる人へのメッセージ

これからは様々な既存の枠組みが取り払われ、企業・組織の形や職業も変化していくと思います。既存の枠にとらわれることなく、自分がやりたいことや興味があることを、一つに決めることなく追いかけること、そして、そこから感じる喜びを大切にしてください。

瀬戸市消防本部

武田 夏姫 さん

違う自分になるのではなく、自分のできることを。



「男社会」に入っ

人の心の動きにリアルタイムに携われる仕事に憧れ、消防士を志しました。瀬戸市は消防職員が約一三〇人いる中で女性は二人だけですので、いわゆる男社会です。男性はさっぱりしていると先入観で思い込んでいましたが、過酷な現場の後には男性でも心のケアが必要ですし、実際には単純ではないことを知りました。

自分らしさを忘れていた

入庁当初は、男らしくなろうとするあまり自分らしさを忘れていました。そんな自分の姿を見た先輩職員から、「女なんだから男になろうとするな」と言われ、最初は「求められているのは女らしさではなく、男らしさなのではないか」と感じましたが、「違う自分になるのではなく、自分のできることをやれ」というメッセージであることに気付きました。それからは持ち前の体の柔軟性や観察力に磨きをかけ、より男らしく、現場でやるべきことをやれるようになりました。

本当の配慮とは

東日本大震災発災直後に被災地へ派遣されましたが、現地では男性隊員がほとんどである中、女性である私を派遣することにに対し、寝る場所・トイレ・予期せぬ事態等の問題から、職場内で今後女性を派遣することに対する議論が巻き起こりました。発災現場では、女性同士の方が安心してもらえることも多く、自衛隊や警察など、災害の現場で活動する女性が増えています。女性隊員を派遣するかどうかで悩むのではなく、女性も現場で活躍できる体制を整えておく必要があると感じます。

生活と仕事の両立

家事は電化製品に頼ったり、料理をするときは二品を同時に作ったり、いかに効率的にこなせるかを考えています。家事も仕事も完璧を目指すのは無理ですので、力を入れるべきところを見極めるようにしています。

今後の目標

市民のために働くのは当たり前ですが、仲間のために働ける職員になりたいです。職員が働きやすい職場をつくっていきだいたいと思っています。



進路に悩んでいる人へのメッセージ

自分は結果的になりたいと思う職業に就きましたが、早い時期からやりたい職業が決まっているかどうかは重要なことではなく、その方が優れているわけでもありません。自分の大切な人を幸せにできるのであれば、どんな仕事でも素晴らしいと思います。

夢ありきで進路を決めるのではなく、選んだ道の先に幸せがあるように、まずは「未来の自分の為にできること」から始めるのがいいのではないのでしょうか。

インターンシップ生の感想

今回のインターンシップは、ジェンダーバイアスについて高校生なりに考えるという特別なものでした。初めは「ジェンダー」という言葉自体よくわかっていませんでしたが、インタビューを通じて性別や環境に縛られない生き方があることを知り、進路を考える上で励みになる言葉もたくさんいただきました。



平成二十九年 瀬戸市男女共同参画 社会推進川柳コンクール 入賞作品

性別に関わりなく、だれもが自分らしくいきいきと活躍している社会をイメージできる、男女共同参画をテーマとする川柳を募集したところ、たくさんの方の個性あふれる作品をご応募いただきました！厳正なる審査のうえ選出された入賞作品をご紹介します。

小中学生の部 最優秀賞

とじむんと おうちのじいじと
たのしいよ

長根小学校二年 加藤 慈基 さん

一般の部 最優秀賞

男女みな 十人十色
輝こう

聖霊高等学校二年 佐藤 綾香 さん

小中学生の部

優秀賞 いろいろな こどもがいても いいんだよ 西陵小学校一年 安部光真さん

佳作 この世界 どんな人でも かがやける 幡山東小学校五年 長江巧磨さん

佳作 お父さん 家にもしごと ありますよ 幡山東小学校五年 近藤佑磨さん

佳作 みんなでね 男女わすれて あそぼうよ 幡山東小学校五年 柘植悠希さん

一般の部

優秀賞 手抜き飯 弾む会話が かくし味 寺本直子さん

佳作 お母さん 働くあなたも かつこいい 聖霊高等学校二年 盛永碧さん

佳作 お迎えの パパに飛び込む 子のダッシュ 加納明彦さん

佳作 支えあい いたわりあって 生きやすく 梅村明美さん